

Title	<雑録>新たに発見された玄奘三藏の遺骨
Author(s)	
Citation	東洋史研究 (1943), 8(1): 41-43
Issue Date	1943-03-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/145780
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

佛印だより

藤原利一郎

舊臘三十日海防から河内に入り、爾來河内滞在二十日、梅原先生は講演や宴會茶話會等に非常にお忙しく、小生は殆んど毎日遠東學院に通ひ、同院のゴルベフ氏その他關係佛人安南人の好意により同院の見たい書物を自由に閲覽いたしました。

尙この間休日を利用して河内のフィノイ博物館や文廟その他を見學しましたが、中でも河内北方北寧に支那の古墳を訪ね、或ひは安南國境地方に胡朝の城址（胡朝の城址については「考古學雜誌」三二卷二號山本氏論文參照）を見學したり、清化博物館やドンソンの漢代の古墳を訪ねたことは非常に有益な思ひ出であります。

十九日、梅原先生が河内の豫定を終つて西貢に行かれることとなりまして、小生も同行させて頂くこととなり、二十、二十一兩日は順化に滞在、安南の王宮、啓定博物館、王室文庫を見學、また南郊の嗣德明命兩帝陵を佛人の案内で見學しました。二十二日はツーランに至り、パルマンチエ博物館を見學しました。小さい乍らもよくチャム藝術の粹を一場に集めたものと感心しました。二十三日は雨をおかして會安に至り日本橋を視察、御朱印船時代の日本人發展のあとを偲びました。併しこの邊は今華僑と安南人の混血種、所謂明郷が多い由で、明郷社なるものの建てた寺院

新たに發見された

玄奘三藏の遺骨

西遊記のご主人公で有名な玄奘三藏の遺骨が、南京でわが勇士に發見され國民政府に引渡された。これは、舊臘南京中華門外の報恩寺跡に稻荷神社を建立中のわが高森部隊の兵隊さんが、同寺の唐代古物と一緒に發見したもので、種々調査の結果本物に間違ひなしとわかつたので、二十三日朝十時半發掘現場で大使館を通じ高森部隊長と緒民誼外交部長との間に移管式を行つた。

これは二月二十四日付の大毎夕刊にのつた同盟通信記事であるが同日付の現地新聞「南京大陸」には次のやうな詳報がのせられてゐた。

鳩摩羅什とともに東洋精神文明を開化した玄奘三藏の遺骨が、東亞解放の聖願達成を目ざして參戰した中國の首都南京においては、か

の如きが附近にあります。

二十五日から二十九日迄西貢に滞在、博物館及び目下開催中の佛印大博覽會を見學し、その中の歴史館や遠東學院館を特に興味深く見て來ました。四十年の學院の業績、佛印に於ける考古學、民族、土俗方面の資料を出品し、素人にもよく分る様、要領よく陳列されており、佛人の勘のよさに感心しました。尙この間二回に亙り小生はシロンを見學、製米所や各種工場内も視察しました。華僑の經濟方面に於ける支配力の大きなることを痛感しました。併し現在日本出先官憲が指導に當り、殆んど完全に日本に協力してゐる様子であります。

三十日より去る六日迄アンコール旅行を行ひ、この間ブノンペンに歸途二泊、王宮や博物館を見學しました。この博物館は數は多いが玉石混淆で雜然として居り、ツーランのチャム博物館には餘程劣つてゐる様に感じました。サイゴンからアンコール迄五百六十軒もあり、普通なら二日ばかりで郵便バスに揺られて苦しい旅をするのですが、佛印側の好意により我々の爲めに車を出してくれ、僅に八時間で到着しました。同地滞在四日間、コンセルバタールのグレイズ氏、パルマンチキ翁の懇切な案内により附近の有名な遺蹟はすべて見學し、殊に小さい乍らもアンコールワットよりは遙かに優れた彫刻を有するバンタイサムレーへ案内されたことは我々の幸福であります。實際こゝは國境地帯でもあり、相當の距離があるので

らずも發見されてより二ヶ月餘、その間に眞偽を繞つて日華の考古學者、歴史學者の間に活潑な論争がくり返されたが、文獻と事實によつて玄奘の遺骨であることか確認され、いま遺骨發見より確認までの經過を述べれば次の通りである。

南京中華門外の○○部隊は明朝時代の大報恩寺で、その前身は三國六朝時代から唐代までの長干寺であり、宋代は天禧寺と稱されてゐた。寺の東院には三藏殿があり、そのうしろに三藏塔があつた。たまたま○○部隊で、この寺址の西南方にあたる小丘に神社建立のため地均らしをしたところ、久しく湮没した宋代の三藏塔の跡を發見そこから五十糎平方、高さ三十糎の石函一つを發掘した。石函の一面には宋代の字體で

大唐三藏大編覺法師玄奘頂骨、
早因黃巢發塔、今長干演化大師
可砂、於長安傳得、於此葬之
天聖丁卯二月五日阿緣弟子唐文
遇德文慶弟子丁洪審弟子劉文進
弟子張竊

と刻んであり、他の一面には明代の字體で

玄奘法師頂骨、初在天禧寺之東

大概の旅行者の見逃してゐる所であります。併し何よりもこゝで感心させられたのは、自然の威力、驚くばかりの旺盛なる生長力を有する熱帯樹に對抗し、地中に埋もれた遺跡を掘り出し、再建し修理し、またこの保存に努力してゐる現場を見學し、この熱帯の暑さにめげず僅かの人力を率ゐて文化遺蹟の保持と研究に努めてゐるグレーズ、パルマンチェ氏等佛人學者の偉さであります。

御蔭を以て六日小生等西貢に歸着、今八日小生のみ梅原先生と別れ河内へ歸ります。同地に暫く滞在、遠東學院、圖書館等で資料を蒐集の後歸國したいと思つてゐます。

佛印側の日佛印文化協力に關する理解と熱意は、小生の拜聽した五回に亙る梅原先生の講演の盛會さや、特に我々に對する佛印側官憲學者達の好意により知ることが出来、少くも文化面に於いて日佛印協力の可能なることを感じました。尙佛印に至つて強く感じた事は、以前東亞の中でも最も在留邦人の少かつたこの地方にどこへ行つても、主な所は日本人を見受けることであり、我が國力の無限に浸透しつゝある偉大さに胸を打たれ、日本人たるの誇りを強く感じました。

二月八日

サイゴンにて

これは舊臘初旬、第二回日佛印交換教授として佛印に渡られた梅原博士に隨行して、目下同地滞在中の藤原君より田村實造氏宛に送られたものである。

崗、大明洪武十九年受菩薩戒弟子黃福燈普賢遷於寺之南崗三塔之上。是歲丙寅冬十月傳教比丘守仁謹誌。

と刻んであつた。函の中には玄奘法師の頂骨を入れた薄い銅箱があり、箱は腐爛してゐるが、なほ「唐」「三藏」「師」等の文字を見出すことが出来、その字體は宋體に類似してゐる。

この外、金屬の箱が一つあつて、中に銀箱が一つあり、その銀箱の蓋に「大元至順三年壬申四月十六日天寧寺住持弘教大師演吉祥置」と刻んであつた。銀箱の中には、金製の佛像と念珠、小玉器、瓷器の各祭典用の品物及び唐宋元明四朝の古錢等があつた。

そしてこの發掘物は文物保管委員會谷田研究員によつて確に唐代の玄奘法師の遺骨であることが明瞭となつた。これは宋代の景定建康志卷四十六に

端拱元年僧可政往終南山、得唐三藏大編覺玄奘法師頂骨、爲建塔歸瘞於寺

と記載してゐることと合致するものであり、また研究部幹事顧天錫氏もこの研究の正確であることを立證した。